立教大學新聞
月刊（十日發行）
錢十部一冊（價定）
閲覧料年一科金壹錢
錢十三行一段字五十科告廣
（増割三定指所場）
發行兼編輯人　東京都豐島區巣鴨　中村正三郎
内學大教立　東京都豐島區巣鴨
發行所　立教大學新聞部
電話大塚（86）六八〇七番
振替東京二五番

近代戰と交通事業

陸海空、綜合交通機關の充實と交通事業の整備に關して

島田孝一

昨年の十二月に發生した大東亞戰爭以來、皇國は到る處に於て異常なる戰果をあげ、今や東亞の重要地域は我國の支配下に置かれるに至ったのは眞に慶賀に堪えないが、もしこの機會に吾々は此の度の聖戰の前途を考へるならば、それが目的が完全に貫徹されて眞の意味に於ける世界平和の時代が到來するのはいづれの日であらうかを熟慮に豫期するのは容易ではないのである。惟ふにこれは必ずしも近い將來にあると斷定することは出來ないのであり、所謂長期戰の覺悟をとるのは免れない處であらう、かゝる豫想が確中してゐるとすれば、吾らは今しばらくの間は所謂反轉期國と戰場に於て相まみゆるのは除機なき次第であって、もしこの期間を通じて、我國としては戰線と銃後とを問はず、あらゆる意味に於て最も完全な準備をとゝへの慎重なる態度をとるのを忘れてはならないのである。

斯かる機會に於て交通機關と交通事業とが分擔すべき領域は極めて廣汎であり重要であるのは云ふまでもない。例へば戰爭の遂行のためには高度に充實した輸送力の確保が要請されるが如きはその一つの場合であって軍需及軍需品の思ふがまゝなる輸送は、近代戰に勝利を收めるためには、缺くべからざる要件である。この目的を達するためには、各種交通機關の指導上、常に大量にして高速度の輸送が保證されなければならず、また使用される交通機關の種類も複雜に渡るのを普通とし、海陸空の交通機關は何れも缺くことの出來ない位置を占めるのである。近代戰の遂行と近代的各種交通機關の利用とは實に不可分の關係を保つのである。

これと同時に一層注意を拂ひたく思ふのは、一國の經濟力の充實上に缺くべからざる交通機關の地位そのものである。近代戰に於て最終の勝利を獲得しやうとすれば、戰線に於ける戰鬪と相等しき重要性をもつものとして、凡ゆる資源を動員して一國の經濟力の發揮に努めるべき必要は多い。就中生産力の擴大と充實とは實に大切な問題であって、これに關してとられる措置の巧拙は直ちに戰爭の結果の如何を決定するとさへ云ひ得るであらう。既に勇戰さるべき基本的要素のある部分は、海外諸國のために運搬するのが保證されなければならない。

この意味に於ける生産力の擴充と交通問題とは、著しく密接な關係にあると言ふべきであらう。就中生産力の擴充に必要なる重要物資の理想的輸送は、高度の注意と拂ふに價する點である。一面に於ては戰爭用物資の充分なる生産と供給とがとりあげられる。かゝる物資は生産するために必要なる原料資材は、常に厳調なる移轉が確保されるやうに輸送されなければならず、且一度生産された物資は國土滿なる供給が行はれるのも望まなければならない。更に他の一面に於ては所謂銃後の國民生活をして可及的高度に充實せしめるやうに常に安全と大量と迅速と低廉との要求に滿されながら供給が可能であるのを望みたい。更に進んでは有の如き物と人との移轉に關して如何なる能率が定められ運賃が徴收されるのが最も好ましいかも考慮に價すると言ふ得べく、他に商賈が要求されてはならない筈である。他の事情がこれを阻止しない限りは、出來得る限りの低廉なる運賃の下に於てあらゆる輸送が實施されるやうに顧るのは、戰時下の交通對策としてはたしかに賢明なる態度であらう。

交通機關と交通事業とは戰時下の社會に於て特殊の考慮たらしめてその能力を發揮せしめるやうに努めなければならないのは勿論であるとしても交通事業の經營の内部にはこの目的を達するために決して餘裕綽々たる狀態ばかりが認められるとは限らない。交通機關の能力は戰時には十分に發揮されなければならないに拘らず、あるひは資材の不足から、あるひは勞力の供給難から決して思ふがまゝなる活動が保證されてゐるわけではない。交通機關と交通事業とが

芸学

フランス精神に就て

……フランスの風土と歴史を基礎としてゴール人の特質と、肉と反抗の精神である……

小林正

■フラ■ンスの特徴は、一面では、ユスプリ・ゴーロワ（ゴール人の精神）に答へるであろう。言ふまでもなく、フランス人は幾多の人間の集團であるから、その特徴は唯一なものではないが、しかし、その中で最も目立つてゐるのは、言葉通りゴール人から継承したこの精神なのである。

ゴール精神とは、一口に言へば、理智と皮肉と反抗の精神である。これは彼の「方法論」を見ても明瞭である。フランス人は、理智よりも、まづ理窟が通つてゐることを尊ぶ。論理に反することは、何れの場合にもこれを嫌悪する。從つて、フランス哲學の祖たるデカルトが、理性をもつて優位たしこれによつて方法論を著したことは敢へて異とするに足りない。さうしてこのデカルトの「方法論」が爾來フランス哲學の主潮となつてゐることは勿論、更にフランス文學一般もまた、デカルトの理性によつて統一されてゐることは言つても過言ではなかろう。

■かや■　うなゴールの精神は、フランスの風土と歴史とを基礎としてゐるのだから、ゴール人の特質と皮肉と反抗の精神である。フランス人の批評精神がそこから出てゐるのも、この故である。

しかし、彼等の皮肉は、悲觀的なある皮肉ではなかつた。與へられた社會的制約に背後するのを嘆じたりしたり、暴力に對して本然的な反逆を企てるけれども、彼等はすねてゐるわけではなく、いはば性質のよい意地曲りなのである。彼等の精神は、ゴールの場合とも明瞭である。

フランス文學においては、「薔薇物語」を以て、ゴール精神の現れた最初の作品と見ることができよう。これは第「ルナール」を中心として、利己主義の獅子王や、間抜けの「ルナール」などが出て來る、寓話であり、那は、ゴール精神といつてもうまい汁ばかり吸つたのである。これは平民詩であり、「被支配階級の人生觀」を述べたもので、人生をいかにうまく切り抜けてゆくか、愛欲が敗れて、「敗事多し」ゆえ、「面白く」日に暮らす人生を述べてゐる、不合理な處世訓を説いてゐる、不合理な處世訓を説いてゐる、不合理な人生における矛盾を、皮肉と諧謔とによつて社會を諷刺しようとするゴール精神が看取されるのである。

■かや■　うな精神の特徴は、これ以後、二大潮流となつて、フランス文學の代表的作家の主要作品に現はれてゐる。就中中世紀後半に出た笑劇「パティラン」、十六世紀のラブレエの「ガルガンチュアとパンタグリュエル」、十七世紀のラ・フォンテーヌの「寓話」、モリエールの「喜劇」、十八世紀のヴォルテールの「カンディド」、その他十九世紀のバルザックの「人間喜劇」、ポオルとヴィルジニ」、ポオルとヴィルジニ」、アナトール・フランスの小説等が挙げられよう。

ゴール精神のもう一つの特徴は、肉感性に富み、感覚的な點である。フランス人は、よく「肉」を「酒」に例へる。酒は、人間の思想、感情、用法を種々の手段ではなく、ある民族に於ける言語や、種族に於ける酒のことで、好んで奏でる樂器であり、人間を元気づける清涼剤なのである。眼から出る涙が感じやすい、ある意味では、にとつては、酒は、人間を元気づける清涼剤なのである。

■かや■　うな意味の特徴は、ゴール人の特徴であるとともに、フランス人の特徴でもある。フランス人は、ゴール人の特徴を、ある意味では、ゴール人の特徴を、ある意味では、ゴール人の特徴を、ある意味では